

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 24 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03147

研究課題名(和文) 10-19世紀華北における碑刻を中心としたアイデンティティ変容に関する社会史研究

研究課題名(英文) Emergence of New Ancestral Narratives in North China during the 10th to 19th Century

研究代表者

飯山 知保 (IIYAMA, Tomoyasu)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：20549513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：13世紀から19世紀の中国華北における、祖先伝承の記録を目的とした史料(族譜・家譜など)や、関連する碑刻史料の収集・分析、そして13-14世紀の華北における新たな碑刻慣習の勃興とその背景についても考察を行った。

前者の成果は、複数の学会における研究報告と、日本語による一般読者に向けた概説的文章として公表された。後者の成果は、ハーバード大学出版社より、英語の専著として出版された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、史料が偏在する南方中国を中心とした行われてきた歴史的「中国」社会の研究に対し、碑刻史料を全面的に用いて史料の欠落を補った上で、いままで通時的な知見に乏しかった華北社会の歴史を明らかにした。この結果、歴史的「中国」における社会の構造や、国家との関係、そして非中国的要素の存在のあり方などには、非常に顕著な多様性があり、とくに外来の征服者の統治がいかん、そしてどのくらい長く行われたのかにより、在地社会の指導者層のあり方や、その存続の原則などに、従来は想像されてこなかった非中国政権の統治の影響・痕跡があることが分かった。

研究成果の概要(英文)：I collected genealogical texts, stele inscriptions, and other relevant sources (including recent publications on ancestral history) narrating ancestral narratives originating from the memories of Mongol rule in North China during the thirteenth and fourteenth century. While exploring the rise of a new epigraphic practice during the Yuan era (1234-1368), I also investigated how the same stele inscriptions were read and reinterpreted after the demise of Mongol rule in China and brought about the new ancestral narratives that led to the emergence of the proto "minzu" identities.

I published articles on the topics in English and Japanese, have one of my books translated in Chinese, presented papers to multiple conferences, and published a book in English.

研究分野：中国華北社会史

キーワード：碑刻史料 モンゴル統治 祖先伝承 碑文の再解釈

1. 研究開始当初の背景

農牧接壤地帯に位置し、外来民族の征服と大量移住を繰り返し経験した華北では、ユーラシア大陸東部において特に多元的な社会が歴史的に形成されてきたと考えられるが、華北伝世文献の少なさは、かかる社会変動を通時的に検証することを困難としてきた。その一方で、中華人民共和国を形成する 56 の「民族」は、1950~60 年代の「民族識別工作」により策定されたが、中国大陸で行われる歴史研究はこの公式な「民族」ナラティブに基づき、現代の民族概念を過去に投影して行われてきた。また、中国大陸外での研究においても、「漢族」「漢文化」という概念設定は、考察対象となる社会・文化の特質を表象する用語として公汎に用いられている。しかし周知の通り、「漢族」という「民族概念」が存在しない時代の人々を、多分に政治的な現在の概念で定義することは、当然ながら問題に満ちている。そもそも、現今の「漢族」アイデンティティは実際には 19 世紀後半以降によりやく形成され始めた(趙世瑜「祖先記憶、家園象徴与族群歴史」)。さらに Dru Gladney, *Muslim Chinese: Ethnic Nationalism in People's Republic* や Thomas Mullaney, *Coming to Terms with the Nation* といった近年の諸研究が明らかにした通り、「民族識別工作」が規定するその他の「民族」設定も、20 世紀前半の文化人類学的な調査、そして 1960 年代の中国共産党をとりまく政治状況を濃厚に反映している。歴史研究における重大な要素としての 19 世紀以前のアイデンティティ変容の解明は、華北研究、ひいては中国社会研究の大きな課題である。

2. 研究の目的

申請者は 2002 年から、上記のごとく伝世文献史料に乏しい華北社会の歴史研究のため、近年その重要性が認識されてきた碑刻の調査を、華北において行ってきた。当初の目的は、とくに文献史料の少ないキタイ・ジュシェン・モンゴル支配下(10~14 世紀)の碑刻史料の悉皆調査であったが、やがてそれらの伝存状況について興味深い特徴を看取するに至った。すなわち、「神道碑」「墓表」「先塋碑」などと呼ばれる、特定の個人・家系の事績や祖先伝承を顕彰・記録を目的とした碑刻は、元来は墓地に立てられたが、19 世紀に入るとその複製(重刻)が盛んに作成され、墓地以外の場所に設置されるようになる。また同時に、かかる 10~14 世紀の碑刻に基づき、新たな家譜・族譜が作成されてゆく。興味深いことに、この過程で、祖先伝承とモンゴルなどの「民族」アイデンティティが突然「復活」した事例を、少なからず確認することができた。さらに、現在そうした、原碑そして重刻の碑刻の周囲に住み、往々にしてそれらを保護する人々は、碑刻の記載を根拠として、「民族識別工作」で認定された「民族」とは異なるアイデンティティをもっている事例も、聞き取り調査を通じて理解するようになってきた。こうした発見を通じ、華北におけるこれまでの「民族」ナラティブを越え、新しい角度から前近代の多元的社会状況と人々のアイデンティティ変容のあり方について考察する必要性を強く認識し、本研究を着想するに至った。そして、次の 2 点の研究目的を設定した。

(1) 碑刻という半永続的記録が異なる時代・場面でいかに読まれたのか

碑刻史料を、それらが設置された時代における社会的意義や機能のみならず、「なぜそれらが伝存してきたのか」という角度から考察する。碑刻とは頻繁に移動させられる文物であり、ひとつひとつの碑刻が現存する背景には、碑刻を利用して成し遂げられようとした社会・経済・文化・政治的ななんらかの目的が存在する(井黒忍『分水と支配』)。本研究では、地方志・家譜・族譜や同地域の碑刻との対照、そして聞き取り調査により、「神道碑」「墓表」「先塋碑」といった碑刻が現存する歴史的背景を検討する。この際、Helen Siu, David Faure, Michael Szonyi らによる一

連の歴史人類学的なアプローチに基づき、碑刻が所在する特定の村落の歴史における社会的・文化的コンテクストに、いかに碑刻そのものの読まれ方の変遷を位置づけるかに特に注意を払う。

(2) 19世紀以前の華北における重層的なアイデンティティ変容のあり方

上記のような碑刻の伝存のあり方を通時代的に検討することにより、それぞれの時代における碑文の解釈のされ方の違いが、読み手のどのようなアイデンティティを反映しているのかを検討する。その準備作業の一端として発表したのが、下記「研究業績」にある“A Tangut Family’s Community Compact and Rituals”(2014)であり、13世紀に華北に移住したタングトの後裔が、モンゴル帝国の衰亡、明朝の華北征服と新たな統治制度の確立、そしてモンゴルなど外来征服者の歴史への好意的な姿勢をもったマンジュ人の清朝統治の到来などを経て、タングト(13~14世紀)→「夏人」(15~16世紀)→タングト(19世紀)→モンゴル(20世紀)とアイデンティティを変化させ、現在は漢族に分類されながらも「実際にはモンゴル」との認識を抱く事例を論じた。このタングト家系(河南省濮陽県楊什八郎村の楊氏)の事例は決して孤例ではなく、下記「研究計画・方法」で述べるように、同様の碑刻は華北各地に広く分布する。かかる事例は、これまで考究するすべがなかった、10世紀のキタイの燕雲十六州征服以降の華北社会の歴史における、社会的・文化的な多元性の中でのアイデンティティ変容の諸相を通時代的に知る上で、非常に貴重な手がかりとなるだろう。

3. 研究の方法

本研究の骨子は、現地調査による碑刻・民間文献の徹底的な調査と、聞き取り調査にある。これまでの準備段階で研究対象にしぼった村落を訪れ、碑刻の実見・記録と聞き取りを行うと同時に、省レベルの図書館に赴き、主に19~20世紀に編纂された家譜・族譜・地方志を調査する。そして、かかる史料の比較により各時代の立石者・撰者・編纂者のアイデンティティを、同時代の政治・社会状況の変化とともに検討する。同時に、「宗族」などと呼ばれる、彼らが属する親族集団とその規模・範囲の変遷についても、祖先伝承の枠組みを決定づける背景として考察する。

4. 研究成果

陝西省南部に存在する幾つかの村落とその碑刻の調査を行った。具体的には、陝西師範大学の揮興根教授とともに、陝西省大荔県扈家村を調査中心地点とし、モンゴル時代に当地に移住したモンゴルの後裔と自ら主張する同村の扈氏一族に聞き取り調査を行い、また彼らが所蔵する嘉慶年間の碑刻3通およびモンゴル時代の碑刻1通を調査した。さらに、同じくモンゴル時代のモンゴル移住者の後裔を称する、大荔県全家村、傅家溝でも同様な調査を行った。このほか、シンガポール国立大学の Jinping Wang 准教授とともに、大同を中心とした陝西省北部と内モンゴル自治区南部において碑刻・文献調査を行い、研究されていない大量の碑刻およびモンゴル時代に遡る祖先伝承の収集を行った。

碑刻の様式的な特色と、その周辺の彫刻・壁画などの文物の造形への影響、またそうした文物の配置というコンテクストの中での碑刻の設置の意義などを、それぞれの文物の様式的な発展から検討するため、美術史研究者と会合をもった。具体的には、2017年9月14-17日にオランダの Leiden University で行われる The Second Conference on Middle Period Chinese Humanities において、台湾大学の許雅惠准教授、McGill University の Jeehee Hong 准教授、シンガポール国立大学の Jinping Wang 講師とともに、大荔県扈家村に関する研究報告を行い、その時点での研究成果に対するフィードバックを得た。これを契機として、2018年には国立シンガポール大学・北京大学・南開大学で招待講演を行い、2019年には本研究の全体像を示すこととなった報告を、再び国立シンガポール大学で行った。

2020年度からはコロナ禍のため、現地調査ならびに学会報告がほぼ不可能な状態となってしまうが、オンラインで族譜や碑刻史料集などを購入し、研究を継続した。その部分的な結果は、「族群政治与科举社会——《另一种士人》研読会」(北京大学中国古代史研究中心, 騰訊會議(中国語), 2021年6月19日.)、「“先塋碑”兴亡所示的北方社会变动和延续性」(《日中文化学报》2021年度海外学者论坛, 騰訊會議(中国語), 2021年10月21日.)、「蒙元統治下華北官員家族的文化適應和延續性—以『民國濰縣志稿』和『民國昌樂縣續志』所載的先塋碑為中心」(第三屆中國文化研究國際論壇, Zoom(中国語), 2022年8月25日.)といったオンライン学会で発表し、フィードバックを得た。

またこの間、自著である飯山知保、『金元時代の華北社会と科举制度—もう一つの「士人層」—』(ISBN 978-4-657-11706-9, 東京: 早稲田大学出版部, 434 pp, 2011年3月30日.)の中国語訳であり、本研究計画の基盤となった、飯山知保[著]; 鄒笛[訳], 『別一種的士人—金元時代的華北社会与科举制度』(中国語), 杭州: 浙江大学出版社, 520 pp, 2021年2月5日.)を出版した。この中国語版に対しては、中国語圏から多くのフィードバックを得ており、本計画の推進に際しての、新たな碑刻の情報などを得る契機となっている。

こうした研究の結果、モンゴル時代の華北で新たに広まった「先塋碑」などの碑刻慣行は、同時代の親族組織の構造変容に大きな影響を与えたのみならず、モンゴル支配が終焉を迎えた以降の後世においても、その碑文が再解釈され、新たな自己認識の淵源となったことが明らかとなった。その過程の一例は、Tomoyasu Iiyama, *Genealogy and Status: Hereditary Office-Holding and Kinship in North China under Mongol Rule*, Cambridge (Massachusetts): Harvard University Asia Center, February 7, 2023. (ISBN 9780674291294)のchapter 5に詳述した。こうしたモンゴル時代の記憶の検証を促進したのが、17世紀後半から行われた、『大清一統志』の編纂事業であった。最終的に帝国全土の歴史を、中央政府が一元的に編纂・管理することを目指したこのプロジェクトにおいて、最も積極的に推進されたのが、忠義や政治的な功績により歴史に名を残すべき人物の検証であった。一統志の編纂の基礎となったのが、府州県志→省志という段階的かつ重層的な「地方志」(当該地方の地理歴史を集成した文献)の編纂であった。より小さな行政単位での地理歴史の集成をさらに集成する形で編纂された省ごとの地方志は、最終的には集成されて帝国の一統志となることとされた。この過程で、帝国全土で無数の歴史上の偉人が再発見され、州県の「忠義祠」などの顕彰施設に祀られ、その子孫は国立大学への無償入学の資格など、さまざまな特典を付与されることが多かった。本研究計画で調査した事例の大部分でも、①モンゴル時代に祖先が華北に来住、②モンゴル支配下で碑刻などの史料を残す、③『大清一統志』編纂のための地方志編纂の普及という背景のもとでの、各地でのモンゴル時代の祖先伝承の「再発見」・顕彰、そして地方志への記録による公的な認可という共通のパターンを見出すことができた。その一例は、「回顧されるモンゴル時代—陝西省大荔県拜氏とその祖先顕彰」, 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉[編], 『元朝の歴史—モンゴル帝国期の東ユーラシア』(東京: 勉誠出版, 2021年6月, pp.139-150.)で詳述した。

こうした、中央政府による「祖先伝承」の公認は、アイデンティティの形成・定義そして維持という点で、20世紀半ばの「民族識別工作」をある意味先取りするものであり、歴史的な「中国」における集団としてのアイデンティティ形成の特殊な点のひとつであったと考えられる。換言すれば、歴史的な「中国」においては、支配下の人々を識別し、その歴史を管理しようとする王朝の強烈的な欲求が前近代に萌芽しており、それは「民族識別」以前の国家による「識別」とも見なすことができる。その際、祖先伝承=血脈は集団を定義する核心的な要素として機能し続けてきた。この傾向は、現在でも中国国内の多くの地域で看取され、将来もし現在の「民族」が改

変される/変容してゆく場合にも、その基盤となると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飯山知保	4. 巻 1
2. 論文標題 回顧されるモンゴル時代 陝西省大li県拜氏とその祖先顕彰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア	6. 最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯山知保	4. 巻 1
2. 論文標題 18-19世紀華北におけるモンゴル帝国の記憶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史資料と中国華北地域－農耕・遊牧の交錯そとの影響－	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯山知保	4. 巻 なし
2. 論文標題 女真皇帝と華北社会 - 郊祀羣官からみた金代「皇帝」像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学 金・女真の歴史とユーラシア東方	6. 最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tomoyasu Iiyama	4. 巻 なし
2. 論文標題 A Mongol Rising to the Defense of the Realm: "Epitaph for Grand Guardian Sayin Cidaqu	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Chinese Funerary Biographies: An Anthology of Remembered Lives	6. 最初と最後の頁 172-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山知保	4. 巻 1
2. 論文標題 《西隱文稿》所見元明交替与北人官僚	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 十至十三世紀東亜史の新可能性 - 首屆中日青年学者遼宋西夏金元史研讨会論文集	6. 最初と最後の頁 347-381
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山知保	4. 巻 1
2. 論文標題 近現代中国における碑刻調査 - 華北の事例から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代人文学はいかに形成されたか - 学知・翻訳・蔵書	6. 最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山知保	4. 巻 別冊第3号
2. 論文標題 モンゴル・「中国」の接壤地帯としての12-14世紀華北 モンゴル帝国の統治と華北社会の変容	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鳥根県立大学北東アジア地域研究センター 北東アジア研究	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 7件/うち国際学会 10件)

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 蒙元統治下華北官員家族的文化適応和延続性 以『民国Wei県志稿』和『民国昌樂県志』所載的先塋碑為中心
3. 学会等名 第三屆中國文化研究國際論壇(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 族群政治与科学社会 《ling一種土人》研読会
3. 学会等名 北京大学中国古代史研究中心（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 “先塋碑”興亡所示的北方社会変動和延續性
3. 学会等名 《日中文化学報》2021年度海外学者論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 華北の祖先伝承における元代の記憶
3. 学会等名 第二回元朝史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 モンゴル・「中国」の接壤地帯としての12-14世紀華北 モンゴル帝国の統治と華北社会の変容
3. 学会等名 NIHU島根県立大学拠点主催シンポジウム「プロジェクト『北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響』」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 18-19世紀華北におけるモンゴル帝国の記憶
3. 学会等名 東洋大学アジア大学文化研究所公開シンポジウム「歴史資料と中国華北地域 農耕・遊牧の交錯とその影響」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 14-20世紀華北におけるモンゴル帝国の記憶 碑文の再解釈現象を中心に
3. 学会等名 第56回野尻湖クルルタイ(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 “唐宋变革”論及其現状
3. 学会等名 “全球視野下的浙江与日本文化交流史”国際学術研討会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoyasu Iiyama
2. 発表標題 Eminence by Remembrance: State-Certified Resurgence of the Yuan Non-Han Ancestry in Mid-Late Qing North China and Its Legacy
3. 学会等名 “North China as Part of the Inner Asian System, 10th-15th Centuries”(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoyasu Iiyama
2. 発表標題 A Subtle Cataclysm: Rise of a New Epigraphic Genre in North China in the Mongol Eurasian Context
3. 学会等名 International Symposium “Designing Voices and Letters: The Mongols as an Empire of Communication” (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 金元明時期南北方碑刻傳統的信息流通 - 試論先塋碑之衰落
3. 学会等名 「十至十三世紀不同政權間信息流通及其政治功能」工作坊 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 東亜歷史上不同碑刻類型的興亡
3. 学会等名 第十屆東亜人文論壇 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 元代碑刻在明清社会的功能
3. 学会等名 招待講演 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯山知保
2. 発表標題 モンゴル時代碑刻の伝存経緯からみる華北宗族の変遷と“エスニック・アイデンティティ”
3. 学会等名 ワークショップ「宗族と水利から華北の「村」を再考する」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoyasu Iiyama
2. 発表標題 Memory of Mongol Rule and Lineage Building in Ming-Qing North China
3. 学会等名 AAS-in-Asia 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoyasu Iiyama
2. 発表標題 Jin-Yuan Steles and the Formation of Ancestral Narrative in Ming-Qing North China
3. 学会等名 The Second Conference on Middle Period Chinese Humanities (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tomoyasu Iiyama	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Harvard University Asia Center	5. 総ページ数 350
3. 書名 Genealogy and Status: Office-Holding, Kinship, and Hereditary Master-Servant Relations in North China under Mongol Rule	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------